

新 刊
紹 介

廣川勝美著

『深層の天皇——源氏物語の古京』

(人文書院・発行一九九〇年十二月
B6判・二二八頁 二、四七二円)

「いづれの御時にか。」と語り出されるこの長編はその始発において、すでにある不安を読者と共有する。この物語は読む者に不思議と暗い印象を刻印するのである。そこに書かれていることはどこまでも華麗で絢爛であるにも関わらず、というよりそれゆえにいつそう物語の印象は暗い。本書が解明しようとするのも、その物語の暗部のよりどころである。本書においては、「い

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

づれの御時にか。」という冒頭句に、物語の宮廷における噂話としての秘匿性を鋭く看取し、都市伝承としてこの物語が位置付けられているのである。ここにすてずに「王朝女流文学」としてのこの物語の評価との方法論的な鮮やかな訣別がなされている。都市伝承としてのこの物語は何を語り明かそうとしているのか。その輪郭は第一章「宮都の伝承」に語られている。本章は本書の文字通り圧巻であり、スリリングなライト・モチーフはここに明確に提示されている。以下の章は本章の肉付けであり、みごとに変奏となる構成をとっている。スポーツは葵巻、代替りの御禊の祭事にあてられる。この祭事を契機としてあの名高い車争いが誘引され、屈辱をうけた六条御息所の生霊による葵上に對する報復が語られる。この六条御息所の情念は三島由紀夫によって主題化されていることから知られるように、きわめて近代的な「人間的」主題たりうることは自明であるけれども、本書では彼女の私的な感情を超えたところに物語自身の情念を読み取るのである。物語が彼女に負荷した「六条の御息所」という名に

こだわることで、物語の深層のモチーフが徐徐に明かされてゆく。細部の考証の面白さは再現のしようがないが、「悪所の物の怪」の章や「古京への回帰」の章において、いわゆる固有名が持つ喚起力・内包性の可能性がいちいち検証されていく過程は、フェッテッシュなまでに具体的に即し、物語の読解のありようを開示してくれもする。そのような作業を通して、六条御息所の生霊に、宮都に埋没している過去の記憶の顕現を見るのである。それは「平安京に基盤を置く新しい系譜と古京に基盤を置いた旧い系譜の相剋であり、新帝を中心とする新旧の体制の対立の亀裂に代々の鎮まらぬ魂が侵出することであり、帝位に即くことなく無念の死を遂げた親王たちの魂とその周囲の」魂である。随所に挿入された豊富な図版はたんにヴィジュアルな効果をもたらすのみならず、源氏物語研究家の「仲間内言語」でいう「准輿論」なるものが、いかにフェッテッシュな心性に根ざしているかを示しているかにも思えてくる。ことばに執することによって、物語空間の肌理を撫でること。考えてみると、これはこの物語の中

世以来の研究史を受けとめた、きわめて正統的また本格的な注釈の実践ではないだろうか。なお本書と相前後して、南波浩編・廣川勝美編集『源氏物語 地名と方法』（桜楓社、一九九〇年十月）と水原一編・廣川勝美編集『伝承の古層―歴史・軍記・神話―』（桜楓社、一九九一年五月）とが刊行されており、前者は源氏物語の地名に関わる、後者は伝承の方法に関する諸家の論を収める。

谷口孝介（同志社大学大学院文学研究科博士課程）

小野 修著

『アイルランド紛争―世界差別問題叢書 10』

（明石書店・発行一九九一年四月
B6判・四四四頁 四、五〇〇円）

イギリスにおける「アイルランド問題」は、イギリス人自身にとっては実に厄介な問題であり、思い起こすだけでも憂鬱な気分させられる問題であるらしい。だから、イギリス人自身がこの問題にたいして雄弁であることはあまりない。故意か偶然か、しばしば沈黙をまもってしまう。われわれ

日本人などは、イギリスについて語るときには、かれらの表面的に陽気なジョークやおしゃべりに波長をあわせ、この国の「議會主義」や「デモクラシー」を賛美することとに終始する。しかし、おしゃべりの背後にあるその憂鬱さを思ってみることはない。あるいは問題の存在に気付いたとしても知らないふりをすることが多い。だが、イギリスの歴史や伝統のもつ輝かしさの背後に、アイルランド問題のような闇の部分があることは、いまや否定できない事実となっている。この国をもっとよく知るためには、われわれも、そうしたかれらのうさん臭さをいまさらながら直視してみなければならぬのである。

小野 修氏の近著『アイルランド紛争』は、このイギリスの人のもう一つの足跡を、十七世紀の初めから今日にいたるまで丹念にたどった本である。類書では、大体、古くところから二つのアイルランドが生れた一九二一年あたりまでを扱うか、それとも紛争が再燃した一九六八年から今日までを扱うのがつねであった。しかし、ここでは第二次大戦中や戦後の事情にもふれられ

ており、本書を手にとると、アイルランド史の全体を俯瞰することができるようになっている。

この本は基本的な文献をふまえた学術書である。しかし、アイルランドの地でイギリスが数世紀にわたりなにを行なったか、またアイルランドの人々がそれにどう反応したか、かれらはどのような思いで生きてきたかを冷静に記述するなかで、著者は虚げられてきた者への哀傷の念と抑圧者への怒りを、あらためてわれわれに想起させてくれる。あくまでもたんだんとした語り口で語りながら、しかし、アイルランドにおけるイギリス人の所業を通じて、むしろ読者に人間そのもののおぞましさをう感じさせているようにも思われるのである。少なくとも評者はそう読み取った一人であった。アカデミックな本で読者にこのような気持ちを抱かせるものは希有である。イギリスの歴史に関心をもつ人だけでなく、われわれは一体なにものなのかということに思いを馳せる人々に、本書は長く読み続けられるべき著作であると思う。

梅津 實（大学法学部教授）

佐古和枝著

『吉野ケ里―繁栄した弥生都市』

(草思社・発行一九九一年五月
A4判・九五頁 一、八〇〇円)

吉野ケ里遺跡が邪馬台国であるとは著者も考えていないようだが、北部九州で絹織物が多く出土することや、古墳の被葬者や文献資料が女性の重要な役割を示す例が多いことを紹介して、邪馬台国九州説が行間に見えかくれしている。

佐賀県神埼郡の吉野ケ里遺跡は、有明海にのぞむ海拔約二〇メートルの丘陵にあり、これまでに判明した広がり甲子園球場の七・五倍にあたる約三〇ヘクタールを越えている。望楼や大倉庫群を備えた国内最大級の弥生時代の環濠集落である吉野ケ里遺跡は、一九八九年二月に新聞で報道されて以来、魏志倭人伝に記された邪馬台国の姿を伝える遺跡として有名になり、数カ月の間に一〇〇万人もの見学者が訪れたという。

吉野ケ里一帯は、弥生時代から中世にいたるまで江南との交易の重要な基地になっており、輸入された文物の交換の場として

市が発達した地域であった。本書の随所に、魏志倭人伝に伝えられた倭人の世界や中国との係わりが紹介され、吉野ケ里遺跡の内容と相乗して東アジアにおける弥生社会の位置付けがわかりやすく解説されている。

読み進む内に、福岡周辺に目が向いていた従来の北部九州の弥生社会観を考え直す必要があることに気付かされる。

著者は、収穫の秋から農閑期の冬の生活をまじえて春の田ごしらえから再び収穫にいたる弥生時代の吉野ケ里の人々の生活を農業カレンダー風にまとめており、当時の生活の様子をよく伝えている。また吉野ケ里では農耕のほかに、絹織物や青銅器の生産なども活発におこなわれており、これらの高い生産力を守るために環濠が掘られ、周辺の集落との戦いを通して王の権力が強大になり、大陸とも交渉を持つにいたる過程がたぐみに語られている。

子供たちや一般の人達にもわかるように書くのは難しいことだが、著者の佐古和枝氏の文章はやわらかく、それでいて内容の深い格調を持っている。早川和子氏のイラストレーションも、考古学的な成果をベ-

スにしながら、人々の表情がいきいきと描かれている。現代考古学の到達点を充分に紹介しており、歴史の醍醐味を味わえる本である。

小嶋芳孝(石川県立埋蔵文化財センター主査)

辻 裕子著

『Rhetoric and Truth in Milton』

(山口書房・発行一九九一年六月
A5判・三七四頁 三、五〇〇円)

文学はもちろん、宗教、政治、教育、論理学、文法など広い領域にわたる、優れた仕事をしたミルトンはなぜか修辞学には手をつけなかった。作品すべては修辞の宝庫であるのに、なぜか詩の中では修辞学への批判はきつい。

このことはミルトン研究における修辞分野の特殊な困難を物語っている。事実、この分野に挑む人は稀である。本書の意義はまずここにある。

プラトンからアリストテレス、キケロ、クインティリアンに至る古典修辞学の基礎研究に立つて、本書はミルトンの初期作品

から始め、二つの叙事詩と悲劇を考察する。この過程で、古典・ルネサンス修辭学とは異質で、より本源的な真の雄弁である聖書真理伝達の方法を浮かび上がらせる。副題「古典修辭学と聖書雄弁間の対立」は、その意図をよく示している。

議会と法廷における説得の術として生まれた古典修辭学は、体系、技法、用語すべてにおいて、豊富かつ精ちであるにもかかわらず、説得する内容については沈黙のままである。これに対し聖書雄弁は第一に内容であり、それは真理である。この真理の模倣体現を行なうミルトンは、懷疑主義に深く染められたルネサンス人文主義の説得修辭術を越える。

本書は修辭学のこのスケプティカルな側面をサタンの発話に見、詳細に考察する。そして聖書雄弁の方法を予表論として位置づける。これは達見である。

ミルトン叙事詩の旧約世界はイエス・キリストを予表する。即ち新約の真理を先行模倣している。キリスト教による旧約聖書解釈の方法である予表論は、ミルトンの場合、作品素材を分析し、テーマ化する修辭

学で言うインベンティオとして働き、創作原理となっている。しかも既成修辭学とは質的に異なるレベルにおいてである。

この次第を本書が明示していないのは惜しまれるが、懸命に追っている。ミルトンにおける古典・人文主義修辭学の終わりと真理模倣体現の新しい創作方法への転換を、本書はナイーブではあるが、しかし確実に追求している。これが本書の価値であり、わが国ミルトン学が誇り得る一到達点である。

この成果を見る時、修辭学を批判し、止揚するラムス論理学の祖述者ミルトン解明の難事が期待できるのは、わが国ではこの著書において他にないであろう。

原田 純 (愛知教育大学教授)

岡本民夫編著

『社会福祉』

(医学出版社・発行一九九〇年十月
A5判・二七四頁 二、〇〇〇円)

社会福祉をこれから学ぼうとする人々にとっての、バランスのとれた格好の入門書である。岡本氏は、新しい社会福祉情勢をふまえたうえで、社会福祉の基礎的な素養

を幅広く体得してもらうことを編集の目的としておられる。具体的には、編者と九人の執筆者によって、総論六章と各論一〇章で構成されている。総論の目次は、社会福祉の意義と目的、社会福祉の歴史、社会福祉の主体、社会福祉の視点、社会福祉の方法・技術の体系、社会福祉の関連領域となっている。各論の目次は、公的扶助、児童福祉、身体障害者福祉、精神薄弱者福祉、老人福祉、母子・寡婦福祉、地域福祉、医療福祉、司法福祉、女性と福祉となっている。

類書に述べられている重要事項は、本書にも手際よくコンパクトに網羅されている。各執筆者が得意の領域を受け持っているのもので、おどろくにあたらない。さすがである。総論では、社会福祉の主体についての叙述が、類書に比べてユニークである。本書では、社会福祉の主体を、社会福祉はだれが行なうのかに対応させて、政策主体、経営主体、実践主体、運動主体に分けて説明している。類書の多くは、特定の読者層を想定して、特定の主体がどのように社会福祉に関わっていくかを論じている。とき

には偏った視点を強調することになる。本書はこの点でもバランスがとれており、広範な読者層に一読をおすすめることができる。しかし本書の問題点もここにある。社会福祉を職業にしようとしている人たちにとつては、実践主体としての方法・技術をもっと詳細に知りたいであろう。福祉サービスの利用者や地域住民としては、運動主体としての方法・技術やその成果をもっと知りたいであろう。各論の特徴としては、女性と福祉を取り扱っている最終章が、類書に比べて詳細である。また巻末の社会福祉関係法規も、抜粋が適切で、本書の理解を大いに助けてくれる。

共著らしい多角的な視点をもった本書は、自分の社会福祉観を検討しようとする読者に、新鮮な刺激を与えてくれるだろう。

大利一雄（神戸女学院大学文学部教授）

石田光男著

『賃金の社会科学——日本とイギリス——』

（中央経済社・発行一九九〇年十月
A5判・一三八頁 三、〇〇〇円）

この本は日本の製造業生産現場に働く労働者の賃金決定の仕組みを賃金表の分析を通して明らかにし、それを英国企業、あるいは英国進出日系企業のそれとも比較しながら、それらの違いの背景にある働く者達が共有する「公平観」、あるいは職場の「規範」の分析に進み、日本の職場社会の先進性を結論する。

この本は以下の点で斬新である。

1) 日本企業における賃金決定ルールの基礎となる「能力主義管理」の哲学を職場における「社会主義」理論と見なし、その「人間性」の高さを評価する。

2) その結果として日本の労働組合運動に対し、この事実を直視し、「能力主義」の職場における一層の貫徹にその運動の努力を向けることを提言する。

日本企業の先進性を説く書物は街の書店に所狭しとならべられている。しかし、この本はそれらと一線を画す。今日までの先進性論は日本のマクロ経済の高いパフォーマンスに対するプラスの貢献あるいは、マイクロな経営効率性の視点から、日本企業の先進性を結論するものであった。しか

し、それらの主張は常に経済性、効率性の代償として日本の労働者達が人間的な生活という犠牲をはらっているとの批判には無防備であった。ところがこの本はその人間性、汗と油にまみれて働く生産労働者の人間的成長そのものに評価基準を置いた上で、日本企業の社会的進歩性を主張する。

まことに斬新である。今、日本社会がよりヒューマンな、人間そして地球に優しい社会へ向けての道を求め始めた時にこの本が我々の前に与えられたのである。まことにタイムリーと言うほかはない。

中田喜文（大学文学部助教授）

瀬川 晃著

『犯罪者の社会内処遇』

（成文堂・発行一九九一年五月
A5判・四四四頁 六、一八〇円）

本書は「現代刑事政策の基点は社会内処遇にある」、すなわち「現代における刑事政策の任務は、自由刑の弊害を避け、刑務所を中心とした施設内処遇から社会内処遇へと犯罪者処遇の重点を移すことにある」（本書「まえがき」一頁）との基本的立脚点に立つて、犯罪者の社会内処遇を体系的に展

開した瀬川教授の最初のモノグラフィーであり、量的に約四五〇頁に及ぶ長編であるとともに質的にもきわめて水準の高い力作である。以下、本書の優れた特徴の一端を紹介させて頂く。

まず第一に気付かされるのは著者の問題意識と論旨展開の明晰さである。本書の構成は①序論、②第一編―英米における社会内処遇批判の展開、③第二編―わが国における社会内処遇の現代的課題、④第三編―社会内処遇の新たな胎動と展望、⑤終論―総括と提言という形を採り、著者はまず自らの問題意識を明確に示した上で、社会内処遇批判に直面し改革の道を探る英米の現状を詳細にフォローするとともに、わが国の社会内処遇の現状と課題を検討し、さらに英米における社会内処遇の新動向を考察することによって、わが国の社会内処遇の伝統的構造に新しい視座を導入しようとしている。この構成の中で著者の見解は、見事に整序されて展開されているので、本書は高度の専門書でありながら、読者には非常に読み易い作品となっている。このことは考察対象に対する著者の研究の深さを物

語るものであろう。

第二点としては本書における考案方法の周到さと政策的提言の的確さが挙げられる。元来、大学における刑事政策研究者が直面する一つの問題は実務の現状を如何に正確に把握して立論するかという点であるが、著者はこの点にも十分留意して、直接処遇現場に触れ、矯正保護の実務家達からの情報収集に努めており、またイギリス等への留学体験を生かして欧米の社会内処遇の動向をわが国の社会内処遇問題にクロスさせているので、いわゆる机上論に陥ることなく、堅実な政策論の展開に成功している。そして、著者は、全体的総括として、社会内処遇におけるユートピアニズムとの訣別を強調された上で、今後の社会内処遇のあり方につき、①社会内処遇の量的拡大、②社会内処遇の質的充実、③社会内処遇における着実な科学化、④社会内処遇における適正手続化及び対象者の人権保障の強化等を提言されているが、その具体的内容がいずれもきわめて説得的であるのは、前述のごとく、著者が欧米の議論をあくまで批判的に検討され、わが国の実務の現状をり

アルに分析された上で提言されているからに他ならない。本書を学界・実務界の双方に貢献する優れた作品と評する所以である。

森本益之（大阪大学教授）

安岡重明著

『財閥の経営史―人物像と戦略』

（社会思想社・発行一九九〇年十一月）
文庫サイズ・一七九頁 四〇〇円

本書は、「比較」というパースペクティブから「個々の財閥の成立条件」を明らかにするとともに、「国際比較による日本の財閥の位置付け」というきわめて魅力あるテーマを体系的に叙述し把握しようとした意欲的試みである。著者は「日本の工業化に貢献した財閥の実態の解明の必要性」を強調し、そのためには財閥の組織・戦略・企業者（または経営者）等に焦点をあて、それらを国際比較という視点から分析する必要があると力説する。

本書は、著書の問題関心にそって、I 財閥の源流、II 財閥の内部構造、III 財閥

の国際比較というⅢ部構成からなっている。第Ⅰ部では、「ある企業が財閥となるのに、いったいかなる諸条件が必要だったか」という問題意識から、財閥の成立条件について興味ある仮説が提起され、三井家、住友家、鴻池家および下村家の動向の分析を通じて、その仮説の妥当性が検証される。第Ⅱ部には、日本財閥の内部構造の特徴をその家的構造に求め、「創業者が自分の子孫および縁者に、自分の獲得した価値物の成果を脱落者なしに享受させてやりたい、という配慮」(七〇頁)から、その財産に「総有的性格」を持たせることにより、出資持分の自由な処分を禁止したこと、およびそうした「同族結合」が「資本集中」の機構としての機能を果たしていたことが論じられる。第Ⅲ部では、一族の繁栄を維持するものとしての同族的結合が、諸外国の同族経営(ロスチャイルド家、デュポン家、ロックフェラー家など)でも観察されること、が著者独自の国際比較の視点から論証される。

企業に出資する同族間の関係、出資持分の相続人への譲渡および出資者と経営者と

の関係という三つを比較の基準に置き、財閥の国際比較というきわめて魅力ある領域に鋭い分析のメスを入れ、財閥の成立条件を歴史的事実に基づき解明せんとしたその開拓者の努力は高く評価されねばならないであろう。なお、企業者史を研究してきた筆者にとつてきわめて示唆的であるのは、著者が「騒動」とか「転機」という概念を用いて、企業者の置かれた危機的状况こそが、創造的革新の母体となりうるということとを力説している点である。その後著者は多くの実証的研究をふまえた上でこれらの概念をより一層精緻化し、所有者と専門経営者との間の相克状況(緊張関係)をより動態的に把握するに至っている。本書は「騒動」や「転機」が常にプラスとマイナスの両面を内包しているものであることを指摘することによって、「マージナル・マンの理論」が財閥の生成と発展の過程の分析にも大きな有効性を発揮しうることを示唆した注目すべき書物である。

瀬岡 誠(大阪学院大学国際学部教授)

入江節次郎著

『世界金融史研究』

(藤原書店・発行一九九一年二月
A5判・七一頁 二〇、〇〇〇円)

資本主義は本来国民性と世界性の相克のうえに成り立つ社会であるが、本書はその世界性に焦点をしぼり、一九世紀前半のロンドン世界金融市場を舞台として展開された国際投資活動についての精緻な実証研究で、質量ともに入江教授のライフワークの一環をなすものである。

本書は付録、索引などを含めて七〇〇ページ以上、参考文献一、一五四点におよぶ大著で、その全容を紹介することは到底不可能であるが、まず序説「資本輸出史から世界金融史へ——世界資本主義史の方法に寄せて——」において、世界経済史研究の方法について考察されている。その際、従来の資本輸出という概念は窮屈で輸出額の算定も困難であり、それだけでは十分に事態を解明できないとされ、金融活動の国際的連関を究明する方法として新たに世界金融史という視角を提起されている。第一篇から七篇に至る本論はこのような研究方法

にもとづいて、一九世紀前半、とくに一八三〇年代を中心として、ロンドン世界金融市場においていわゆるマーチャント・バンクの活動を媒介として形成されたヨーロッパ諸国とアメリカ合州国との間の金融的連関の諸相が豊富多彩な原史料によって丹念にあたづけられている。とくに一八一六年に設立されたアメリカ合州国銀行によるヨーロッパからの資本導入、棉花手形を中心とする輸出金融、合州国政府債および各州債の発行などの国際金融活動について詳細に分析され、この部分はまさに実証研究の極みともいえる。

これまでの通説的理解では、資本輸出ないし対外投資が活発化し積極的意義をもつのは一九世紀後半以降の資本主義のいわゆる帝国主義段階に入ってからとされ、一九世紀前半のそれは商品貿易を促進するための貿易金融の一環をなすものとして消極的に位置づけられてきたが、本書によるとすでにこの時期にたんなる貿易金融の枠をこえて、ロンドン金融市場を中心として世界的金融連関のネットワークが確立していたことが実証的に解明されている。現代のポ

ルダーレス・エコノミーの淵源ともいえるあり方で、これまでの研究水準を超える労作で、今後の研究に資するところが大きいといえよう。なお感想としては、棉花手形の流通などの金融制度的側面についてもつと明確に説明して欲しいこと、さらに資本主義の発展に対応した世界金融の段階的変化について展望を示して欲しいことなどがあげられる。本書を土台としたさらなる研究の進展が望まれるのである。

内田勝敏・清水貞俊著
藤村幸雄（大学経済学部教授）

『EC経済を見る眼』

（有斐閣・発行一九九一年三月
新書判・二七四頁 一、〇三〇円）

本書の初版は約十年前に出版された。当時ECは一九八〇年代にも尾を引く経済的停滞の中にあつた。この停滞は日、米と比較すると大変目立つものであつた。ECとしては日、米に対する経済的遅れを取り戻さなければならなかつた。またECは一九八一年、八六年と拡大を経験し、加盟国の利益が対立し、政策決定が麻痺し始めた。これを改善しない限り、ECはもはや前進

できない状態に陥っていた。これらの背景をもつて一九九二年の市場統合の完成が必須の課題として掲げられ、機構改革も実現した。本書は新たに付け加えられた第九章「市場統合の完成」でこの間の経過を簡潔にまとめている。また全体にわたつて資料、統計を最新のものに取り替えている。構成も多面的で、初心者にもふさわしく、ECに詳しい人にも耐えられる内容になっている。文章も読みやすく、巻末には用語の解説も付けられている。本書が長い生命を保っている所以である。

金丸輝男（大学法学部教授）

島 弘著

『現代大企業と経営管理』

（ミネルヴァ書房・発行一九九一年五月
A5判・一四四頁 二、〇〇〇円）

経営学が生まれてから、およそ一世紀にもなる。この間に多くの問題が解明され、定説としての扱いをうけている学説も生まれている。それでも現実科学としての経営学の宿命であろうか、未だ討論中のテーマも多いし、また実践の中から絶えず新たな課題も提起されるため、法学や経済学に比

較して「教科書」が作りにくい。今年、商学部で経営学の講義を担当された二人の先生が、この難問にたいして共に単著による「解答」を出された。正木久司著『経営学講義』ならびに島 弘著『現代大企業と経営管理』がそれである。

ここでは、私の専攻分野に近い『現代大企業と経営管理』を紹介してみたい。本書は、人間にとって企業経営とは何かというテーマを国民大衆の立場から解き明かすことをめざし、二つの方向からアプローチしている。一つは、企業経営を歴史的・因果法則的に捉える方向であり、本書の前半部分で現代大企業と経営制度の分析として果たされている。いま一つは、アメリカ管理論における指導原則が現実の経営実践にたいしてどのような役割を果たしているかを解明することであり、それは本書の後半部分における経営者職能論および経営戦略論の批判的研究として具体化されている。

本書の立場、すなわち国民大衆の立場から企業と経営を見極めるとは、どういうことなのか。この点について、本書は巨大企業が国民生活の向上にとって必要不可欠な

製品やサービスを提供するという意味で重要な社会的役割を果たしている点について客観的に分析するとともに、他方ではその巨大企業が利潤追求に走る余り環境破壊、中小企業いじめ、過酷な労働実態、様々な不正取引を引き起こすという意味で反社会的行為をとるため、国民的な批判が必要なることを繰り返して指摘することによって、この根本的な課題を果たそうとしている。

この複眼的な分析視角は、従来の経営学における二重性論とは異なり本書の後半部分の中心テーマである経営戦略論の批判的分析にも生かされている。ここでは経営戦略の「国民生活に敵対する側面」を「国民の統一した力で統制する事」によって、それを国民生活の改善に向かわせることができる」と力説しており、新鮮な読後感を覚える。本書は、経営学のテキストとして書かれたものではあるが、例えば経営戦略論を経営計画論の内容的な発展として位置づけるなど、実務家の今日的な関心に応え、かつ学界での討論にも加わりうる文献となっている。

仲田正機（立命館大学教授）

正木久司著

『経営学講義』

（晃洋書房・発行一九九一年四月）
A5判・三二三頁 三、四〇〇円

経営学の教科書は書くのが大変難しいというのが、経営学の講義を担当している人々の定説である。それは分野がかなり広い事と対象の企業経営自身が日進月歩であることからきているのであろう。本書は、「経営学は利潤追求の学から人間の学へと変わりつつあると構想」（はしがき）されている正木教授の長い間の経営学の講義が結実したものである。

本書は序論に引き続いて三つの部分に分かれている。第一部は教授が制度論と称される株式会社論であり、教授が長年研究を重ねてこられた株式会社を株式会社権力論という新しい視点から、特に株式会社の倫理まで含めて見事に展開されている。「株式会社がいまや経営者支配となり、その経営者の権力の正当性が問われ、その権力行使において社会的・倫理的配慮、つまり人間的配慮が強く要請されるようになって……人間の学としての株式会社論が組上」にのぼつ

てきた」と主張される教授は、さすが株式会社社の長年の研究者としての独自の見解が主張されており、株式会社を学ぶ上で必読の部分であろう。

第二部は管理論の展開が簡潔に説明されておりテイラーから始まって、ドラッカーまでそれぞれの主張とその経営学への発展への貢献が纏められている。第三部は最近大変大きく論ぜられている「日本的経営」について説明されている、それは「日本的経営」の制度的説明である終身雇用制、年功序列制、企業別労働組合の説明と共に、これも著者が長年主張されており、別に一冊の書物として刊行されている「日本的経営財務論」が入門的に説明されている。

以上、簡単に本書の構成を見てみたのであるが、「経営学」の講義という大変難しい内容を比較的平易な文章で、しかも全体を「人間の学」としての「経営学」という教授の主張を軸に見事に纏められている。特に経営学の基礎理論ともいうべき株式会社論が新しい視点からの主張を企業の社会的責任論という困難な領域からのアプローチを含めて展開されている事は注目に値するも

のと言えるであろう。この論理が管理論や日本の財務論にも貫かれるならば、現在日本の金融・証券業界を揺さぶっている問題の解明の理論の手がかりが得られる事になり、講義を聞く学生にも、またわれわれ研究者にも大きな貢献を与える事になるであろう。

島 弘 (大学商学部教授)

同志社大学人文科学研究所編 『山室軍平の研究—同志社大学人文科学研究所研究叢書XXII』

(同朋舎出版・発行一九九一年三月
A5判・五七三頁 一九、八〇〇円)

歳の瀬になると街頭で救世軍の社会鍋がみられる。すっかり定着した光景であるが、救世軍は一八七八年にイギリスでW・ブリスにより創設されたプロテスタントの一派であり、日本には一八九五年に来ている。このとき救世軍に接し、以来、日本における救世軍の祖として活躍したのが本書で扱われる山室軍平(一八七二—一九四〇)である。

山室軍平に関してはいくつかの評伝のほか選集が刊行され、山室と救世軍が展開し

た廃娼運動こそ言及されるものの、本格的にはなかなか関心がよせられなかった。第一に宗教活動と社会事業活動の双方を視野に入れることがむづかしく、第二に資料の収集が救世軍機関誌の『ときのこゑ』などを除いては困難であるうえに、公刊された資料からではある程度以上のことは判明しなかったためである。また第三に、内村鑑三に代表される志士の・理想的キリスト教徒に対し、山室のような平民的・実行的キリスト教徒に研究者の眼は冷やかであったこともあげられる。

このとき、同志社大学人文科学研究所が山室研究にとりくみ、六年間にわたる共同研究の結果を六〇〇ページに及ぼうという書物として刊行したことは、山室に関心をよせる一人としてよるこびにたえない。

共同研究は山室の資料をたんねんに収集し、なかんづく山室家からの資料提供をうけ、綿密な地固めをおこないなされている。多様な角度から山室が論じられているが、本書は「総論」三編、「各論」一四編、労作

の年譜と著作目録で構成される。救世軍の理念や日本救世軍との関係、救世軍の社会

事業と社会運動の具体的展開が「総論」で概観され、「各論」へうつる。

「各論」では、(一)山室の宗教思想、(二)山室・救世軍の社会運動・社会事業、(三)山室の教育実践、(四)山室の思想・伝記事項とに大別しうる主題が、「手記」など新資料をふくむ多くの資料を用い、論点を示しつつ論じられる。分析手法や山室との距離のとり方は様々で、多様な山室の肖像が描かれ興味深い。欲をいえば(準)戦時下の山室・救世軍の動向の分析があつてもよいと思われたが。さらに、本書の価値をたかめているのは一一〇ページにおよぶ詳細な「山室軍平年譜」で、これにより山室の全体像にせまる大きな手がかりを私たちは共有することとなった。

本書は人物研究の魅力と共同研究の長所をあわせもち、一人のキリスト者を復権させた書物といえる。人文科学研究所の従来の活動のうえに産み出されたといえようが、期待を裏切らぬ出来ばえであった。着実・継続的な研究活動に敬意を表したい。

成田龍一(日本女子大学助教授)

庄司俊作著

『近代日本農村社会の展開』

国家と農村——

(ミネルヴァ書房・発行)一九九一年二月
A5判・六二四頁 七、〇〇〇円)

日本の「農村」といえば、現在その存亡の危機に立たされている。というのは大げさかも知れないが、「農産物自由化」という外圧を仮におくとしても、今年の新規農業就業者は数千人、もはや産業としての農業はもとより、農村地域社会の将来像も先行き不透明の状態にある。しかし戦前は日本経済において、農業は産業として大きな位置を占めていたのみならず、農業農村問題は日本の政治経済の特質をつかむ大きな鍵であった。いわゆる日本資本主義論争では、日本の農村の土地所有のあり方―地主制―をどう理解するか、が大きな対立点となったことはよく知られている。日本の地主制を、半封建的性格を持つものとして、さらに軍事的絶対主義的天皇制国家の基礎をなすと規定した「講座派」の見解は、戦後の社会科学にも大きな影響を与えた。その範囲は、歴史学、経済史学はもとより、農村

社会学や丸山真男、石田雄らの政治学にまで及んでいる。

本書は、明治三十年代から農地改革期までの農村社会について、主として地主・小作関係に焦点をあてて子細に検討し、地主の社会的権力の消長を明らかにすることによって、従来の「講座派」的農村観に転換を迫るものとなっている。

本書によれば、地主的土地所有は、「資本主義が未発展で、商人・金貨資本の活動分野が大きく、収奪可能な小生産者が大量に存在する時期にもっとも適合的な土地所有形態」である。そして明治期から大正初期に全盛であった地主の温情的支配による小作人の人格的隷属関係、地主・小作の擬似家族的関係は、決して「封建的」な性格のものではなく、資本主義の確立に伴い不安定化する小作地経営を防衛すべくあらわれた「近代的」な形態であるとされる。第一次大戦後になると、小作争議の激化とともに地主の社会的権力は制約を受けざるをえなくなり、地主・小作の関係は従来の個別的支配従属関係から集团的同権の関係へと変化する。具体的には検見委員会、耕地管

理組合、協調組合などの形をとるが、筆者はこれを協調体制と呼んでおり、「現代的」形態であるとする。

ところで国家の農村支配のあり方はどうか。戦前において小作人の権利をある程度もり込んだ小作立法は何度も挫折した。著者は戦前日本の国家を下からの法制度改革を嫌う権威主義国家としてとらえ、従って国家の農村政策を法や制度のみで促えることは不十分で、行政指導という政策過程を見る必要性を強調する。そうして実質的な農村政策が協調体制への移行をおしすすめる形で進展したことが丹念に実証されている。

こうした著者の農村社会関係のとらえ方は、ひいては日本において何故農地改革が成功したのか、という問題に結びつく。現在フィリピンなど開発途上国において、農地改革の困難さが経済発展の大きな障害になっていることはよく知られている。それに対し、日本の農地改革がGHQ指令によるものとはいえ、大きな抵抗もなく進行したことは、戦前の日本農村の「現代化」の度合いを物語るものである。

従来、地主制史の研究書といえは、地主の経営分析に比重がおかれがちであった。また小作人を分析する場合も、彼らの商品生産者としての成長いかに焦点が当てられていた。本書は地主・小作関係そのものと、地主の社会的権力のあり方を時系列的に一貫して体系的に分析し、各段階において歴史的な性格づけをした、という点で画期的である。ただ、あえていうならば、本書による戦前日本農村のイメージは、非常に進歩的現代的で明るい。しかし戦前の農村は「講座派」が問題にしたように抑圧的な面が強く、「農村問題」はファシズムの大きなきつかけともなったはずである。このギャップはおそらく著者の事例分析の対象となった近畿の先進的な農村と、後進的な東北農村との違いからくるものであろう。しかし従来の後進的農村のイメージを強く持つ人々からすると、本書のクールな分析と主張はやや抵抗があるのではないだろうか。

その他本書においては自力更生運動についても従来の担い手の階層論を越えた新しい視点を打ち出している。そこでは地域的

特徴や、競争原理の導入などの「現代的」性格が明らかにされ、興味深い。

吉田曠二著

庄司春子（高等学校教諭）

『わが生涯の新島襄』

（不二出版・発行一九九一年五月）
（B5判・二九四頁 二、〇六〇円）

歴史の中で脚光を浴びる人物の周辺には必ず脇役というのか、影で支える人物がいる。

森中章光という人は、新島襄に惚れ、生涯を貫いて師と仰ぎ、新島の生きざまを通して神を仰ぎ、キリストの心を知ろうとした人だった。何とかして新島襄の思想を伝えたい、その人となりを伝えたい。この思いは、丁度教会の使命が福音宣教にあるのと同じように、伝えずにはおれない心境へとこの人を駆り立てた。

森中先生が亡くなった時、私たちはこの人を新島研究へと駆り立てた、動機や心境を知りたいと願った。新島襄について、情熱をもって書き、語る先生は、自分のことには極めて寡黙であった。しかし、丹念に書き綴られた日記が残っていた。

この本の著者吉田曠二氏は遺族の了解を得て、日記を紐解き、森中先生の実像とその生きざまに迫ろうとされた。森中先生を知りたいと願う者にとって誠にありがたい本である。と同時に、無名の巨人が、脇役に徹しながら生きたその生きざまの中に、貴重な人生への指針を与えられ、勇気を喚起させられる思いを抱いた。

吉田氏は森中先生の晩年に親交をもたれ、信頼を受けられた人である。先生念願の「新島先生の生涯」の復刻版を世に出した人でもある。氏は復刻の仕事の傍ら、森中先生への関心を一層深められたに違いない。

この本はジャーナリストである氏の文才が随所にみられ、流暢な文は読みやすく、日記の文章を巧みにとり入れて、先生の全体像を浮き彫りにしているところはさすがだと感心させられた。

一言で言って、この本の中で表わされる森中先生は、「森中章光伝」ではなく、新島襄、徳富蘇峰、波多野培根という金糸、銀糸の織りなす布地の中に生きて働き、位置づいている森中先生の姿を鮮明に写し出し

ている、との印象を受けた。新島先生を慕い仰ぎ、徳富蘇峰に信頼され、波多野培根から深く新島の思想を学んだ一人のひとが、その生涯をかけて新島襄を語り伝えようとした姿が、吉田氏の巧みな文章と構成の中で、一枚の美しい布地になって私たちの目に触れるようになったと言えよう。短期間のうちにまとめられたその努力に心からの感謝と敬意を表したい。

佐伯幸雄（同志社教会牧師）

信楽健三著

『塔影』

（「塔影」出版委員会・発行一九九一年二月）
（A5判・二四三頁 私家版）

この書は信楽先生が朝の礼拝やいろいろな所で生徒達に話されたり書かれたりしたものの中からご自身で選ばれ、それを中学校教員有志による出版委員会が編集したものである。

同志社中学校の先生として四十年間、高い文化への希求とキリスト者としての求道心を持って、若い生徒達を導いて来られた一人の教師の懸命な姿をこの書は浮き彫りにしている。歴史を教える先生の歴史の内

から真実を見極めようとする真摯な姿が生きて語りだされている。先生の教えを受けた多くの生徒達にとって、それは人生での最初の心を動かす教えであったのではないだろうか、と同時に同志社教育の土台を作り出していたのでは、この度、この書を読み返して見てそんな思いに打たれる。

先生の教師としての出発が必ずしも教師を天職とする、とまでは思っておられなかったようなところが面白い。しかしいつのころからか、だんだんと真剣なものとして自己の全身を生徒にぶつけて行かれるようになる、その過程が内心での葛藤をも伴って共感を覚えるところである。恐らく若い生徒達の持つ素直さ、真剣さ、無限と思えるエネルギー、それに相反するかのよう組織的で柔和な感受性、それらは限りなくいとおしいものとして先生の心を捕え、この職に深く引き込まれていかれたように思われる。

一九六七年から七年間、校長時代の先生の講話はその中でも特に心のこもったものに感じられるが、一九六一年のキリマンジャロと題されたヘミングウェイの「キリマ

ンジャロの雪」から引用されたお話などは……「さて、そのキリマンジャロの白雪に

被われた頂上には深さ二百米、今は活動を止めている旧火口が不気味な口を開けています。その白銀に輝く静かな火口の一隅に一匹の豹の凍え死んだ屍体が横たわっています。いったいどうして豹は、この獲物のいない白雪に被われた頂上近くまでやって来たのだろう、そして何故ここで死んだのだろうか、……」と語り出された時の生徒達の固唾をのんで聴き入っていた姿が思い出される。現代社会の誘惑に満ちたジャングルを間違わず、なんとか正しい道を歩んでほしい、との強い願いを先生は決して現実的で高圧的な言葉を用いず生徒一人一人の感性にスマートに訴えられたのだと思う。このように先生のお話はカントやドストエフスキー、啄木や芭蕉、ターザンやアラビアのロレンスと天衣無縫に広がっていく。それらの一つ一つが決して難解なものにならずに中学生の心に快く響くものであったことに感心する。先生の文章はエッセーとしても明快で美しいが、どちらかといえば耳で聴く方がもっと良かったと思う、

ということとは先生の教えを受けた者にとつてこの書は一層の価値あるものとなることであろう。

先生が常に訴え続けられたことは、真理とは何か、本当の自由とは何か、であったと思うのだが、この書の為に先生が選ばれた原稿の中に、在職途中にして亡くなられた同僚の先生方への追悼の文と、なかでも若くして世を去った教え子に対する悲しみの大きかったことを載せられているのは、その気持が痛く伝わるところである。

そもそもこの書の出版は、先生の古稀の祝いとして、先生が主催されていた中学校のテニス仲間が言い出したことがきっかけになったのだが、テニスといえば、昨年度は大津で行われた全国健康福祉スポーツ大会「ねんりんびっく」のテニスの部で先生は見事三位入賞を果された程のテニスマンであられる。先生の壮健さとフアイトぶりを覗うことの出来る一書である。

小野功夫（中学校教諭）

池袋清風日記

—明治一七年— 上・下—

明治一八年六月に、同志社英学校邦語神学科を卒業し、同志社女学校教員、同志社図書館司書をつとめた池袋清風が、日々の出来事を克明に記録した明治一七年の日記全文を翻刻・刊行したもので、学生生徒の修学、伝道をはじめ寮生活、教員（外国人教員を含む）の動静などが、克明に記録されている。清風は在学中から桂園派の歌人として知られており、寮の彼の居室での和歌指導の模様や、歌人との交友の記録は、近代文学史の資料としても価値をもつものである。

A6判 約三〇〇頁 各一、〇〇〇円

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話（〇七五）七五一—三〇三七・三〇三八